

はじめに

教育研究所長 千葉 泉弘

ICU教育研究所紀要「教育研究」第41号をお届けいたします。本号の刊行にあたり、ご協力いただいた研究所員の皆様にお礼申し上げます。

本号にはICU大学院の英語教育研究課程において博士号を取得された篠原和子さんと湯浅文子さんの博士論文の要旨を収録しております。研究者としての新しい門出に際し将来のご活躍を祈ります。

さて、大変寂しいことですが、本年も数人の先生方にお別れの言葉を申し上げなければなりません。ご引退後も2年間Visiting Professorとして本学の教学プログラムを支えて下さったDuke先生は、1998年6月に任期を終えアメリカに帰国されました。Duke先生とご家族のご健康とお幸せを祈るとともに、毎春キャンパスにお出でになるとのこと、またお会いすることを楽しみにしております。

近年ICUの教育学科は、受験生の間で大変人気がありますが、教育学科志望者の大半は心理学志望です。大勢の心理学志望の学生に、心理学の基礎や調査法について厳しく指導して来られた向井敦子先生も1999年4月から大妻女子大学にご栄転になられます。先生の残される空間を埋めるのは教育学科にとって至難の業と思われれます。先生の御活躍をお祈りします。

また1997年10月より研究所助手として協力して下さった山王丸浩子さんは国際協力事業団沖縄国際センターに視聴覚技術インストラクターとして赴任されました。教育分野の国際協力を一層活性化されることを期待します。

一方研究所はアメリカのポートランド州立大学から、Duke先生の後任とし

て李麻芝先生をお迎えしました。アメリカで教育思想や比較教育学の先端的研究に従事されてきた先生は教育研究所の新戦力になることは疑いありません。

1998年度からはICUで修士号を取得した山口麻矢、大川多美子、宇田川洋子の3人の新進気鋭の助手が教育研究所の仕事を担当しています。

財政的に厳しい状態に置かれている教育研究所は、この1年、目立った大きな活動をすることはできませんでしたが、教育研究所を教育学を学ぶ学生達に親しみやすい研究所にする努力をしてきました。世界中の国々の教育に関するデータもかなり整備されてきて、各国の教育制度、政策、また教育問題についてのレポートや卒業論文を作成する学生達が頻繁に訪れて来て、研究所も若い人達で賑やかになってきました。

1998年度に数名の学生のために、スハルト政権崩壊直後のインドネシアのスタディツアーを実施しました。教育研究所が、民主化、政治改革の先導的役割を果たすインドネシアの学生達とICUの学生を接触させる労をとることも有意義のことと思います。

また、前号でお知らせした室氏寄贈文庫に続いて、文部省やユネスコで長い間活躍された故飯沢省三氏の遺された貴重な資料が御本人の遺言で寄贈されることになりました。小生の資料を加えて、飯沢・千葉国際教育コレクションとして、日本では珍しいユネスコ関係資料をICU及び学会関係者に提供することになります。比較教育、国際教育、国際協力・援助等に関心のある学生にとって非常に魅力のある研究所に発展するよう努力を重ねています。

本年度から、研究所員の最新の研究成果を毎学期発表していただくために研究報告会を開催することになり、1998年6月に最長老の中野教授に「人口教育促進のためのメディア・ストラテジー」というタイトルで、先生が直接担当されたトルコのJICA援助プロジェクトのケーススタディを発表していただきました。さらに、11月10日には、阿久津教授に「感情の流れ:コミュニケーションの第3の流れ」という題の研究発表をしていただきました。今後とも、研究発表をとおして研究所員相互の学問的交流を図りたいと思います。

「教育研究」第41号をお届けするにあたり、教育研究所の今後のあり方や改善すべき点について研究員各位の御意見をお寄せ下さることをお願い申し上げます。